

わたしもひそかに黒澤明はジ

ヨン・フォードに影響されているとにらんでいる。内田吐夢監督を語る人も少ない。わたしは少年時代に見た中村錦之助の「紅孔雀」が好きだった。いまでもテーマソングを覚えていて。だが「紅孔雀」を語るわたしの世代の映画人はいない。その会で内田吐夢監督、中村錦之助の「宮本武蔵」の5部作は秀逸であると語ったことがあったが、しらすとして反論すらなかった。

宮本武蔵の晩年の書に「五輪書」がある。その書に武蔵は「われ事において後悔せず」と書いている。わたしは「これが不思議でならない」と発言した。武蔵ほどの人が、なぜわざわざ晩年になって「事において後悔せず」などと強がりをつのたろうか。

もとの別離にあるように思えてならない。武蔵が農民に雇われて、一人で村を守る。あれが『七人の侍』のヒントになったのではないか。吉川英治はすごい作家だ。それを忠実に撮った内田吐夢監督もすごいと論じたが、あざ笑うように無視された。し

もなかった。元日に故郷の家に電話をすると、父は「おまえの陰膳はしとる」と諦めるようにいつていた。陰膳とは嫌な言葉であった。10円玉がなくなつて赤電話はすぐに切れた。

1月19日、佐世保にアメリカの原子力空母「エンタープライズ」が寄港した。17日には佐世保の平瀬橋付近で学生と警官が衝突、負傷者が続出した。店頭

秀逸 「武蔵」5部作

武蔵はよっぽど後悔したのではないか。あの橋のたもとでのお通さんとの別離。武蔵は欄干に小刀で「許したもれ」と書いて去る。それを読んだお通さんの悲痛な思いはいかばかりか。

わたしは「戦後流行ったメロドラマのすべては、あの橋のたごした。正月、故郷に帰る旅費

か、1年に1本、5年をかけた武蔵を撮った内田吐夢監督は、やはりすごかったのである。女かなにかで後悔はしているとしても。

とにもかくにも、わたしは1968(昭和43)年を東京で過ごした。正月、故郷に帰る旅費を挟んで12月10日の「3億円強奪事件」。昭和元禄と呼ばれる

(松浦市出身)